

## 第 51 回埼玉文芸賞選評

### 【小説・戯曲部門】

小説・戯曲部門は10代から90代まで、応募作品81点の中から慎重審議の結果、埼玉文芸賞は該当作なし、準賞に山口靖史「閉ざされた宗谷海峡」と青柳智規「いのちの足跡」の2作、そして佳作に長谷川彰「高島秋帆」と木内恭子「山の保養所」が選ばれた。例年同様、人生に一区切りつけられた60代、70代の作品に質量とも厚みを感じられた。予想されてはいたが、70代に入った団塊世代からの応募が目立った。準賞の「閉ざされた一」は戦前、樺太に嫁いだ女性の過酷な半生を淡々と描いて胸を打つ。樺太という舞台の希少性もあった。叙述に濃淡バラツキもあり文芸賞に一步届かなかった。「いのちの足跡」は、病弱な母とその死を軸に、夫と息子、それぞれの心模様をていねいに描いた作品。過去と現在が行きつ戻りつしやや煩瑣な印象は残った。佳作の「高島秋帆」は短編としてまとまっていたが数多描かれている秋帆像に新たな視座を見せてほしかった。同じく「山の保養所」は、リストラに遭い、山の保養所を買って新たな人生に踏み出す男の物語。ていねいな書きっぷりには好感が持てるが展開・構成にひと味工夫が欲しかった。作品数は昨年を22も上回り、県民の文芸熱は盛んのようなようだ。若い世代の頑張りに期待したい。

(相澤 与剛)

### 【文芸評論・伝記・エッセイ部門】

準賞二作品を紹介する。井上敬三「上官に3度答弁「日本は負ける」」は伝記部門で応募した自伝的な作品。満州の陸軍体験とシベリア抑留体験との細部にわたる記憶とその再現力がすごい。大手軍需工場社員として軍用機、戦車、軍艦、輸送船、石油備蓄量などの現状を知悉して応召し、戦争の長期継続が困難な「日本は負ける」と認識しながら戦死覚悟の幹部候補生として入隊したとの宣言は「営倉入り」を回避できた。思えば石原吉郎はシベリア抑留体験を語るのに帰還後10年を要したが、本作の作者は90歳を越えて「体験を後世に伝えたい」思いで語った。

武内和子「学園紛争、もう一つの闘い」は「大学闘争」ではなく「学園紛争」との認識のもとに、地方出身でアナウンサー志望の女子学生が四年生となった1968年、ひたすら就活に努め、それを実現して夢中で生きた半世紀を振り返り「私」は「自分自身と闘い続けた」のだと総括する。「紛争」ならぬ「闘争」のオブセッション。この世代にとって不可避な問いである。今の学生はどんな「闘争」をしているだろうか。

(佐藤 健一)

### 【児童文学部門】

応募作品数は27編。残念ながら今回も埼玉文芸賞は選出できなかった。

準賞1席は、増子敏則「約束の橋」。森に生きるジャイアントスネークが人間の持つスパイスに魅せられ、草をかきわけ忍びよる。魅惑のスパイスがもたらした意外な結末とは……。独特の世界観とほろ苦さを含むユーモア、命を問う姿勢が読者を引き込む物語となっている。

準賞2席は、石垣京子「ねこに、ゆうき」。育児放棄された子ねこのクロが、おじちゃんや鳥やカエル、「ぬし」とかかわりながら成長する物語。丁寧な語り口が温かい。クロの健気さ、おじちゃんの存在も魅力的だ。

佳作第1席は諸口正太「時間の道」。第2席、八女みどり「鳥になったよ!」。さらに浅田加代子「グングンの森」、蒔悦子「ブルースカイボックス」、井上朝之「少女剣士、風を呼ぶ」、木下泉「緑の森公園の秘密」と続く。最後に、今回は奨励賞を選ぶことができた。小堀瑠菜「月の民」、10代でここまで書いたことにエールを送りたい。

(櫻沢恵美子)

### 【詩部門】

応募37点。残念ながら本賞を贈るにふさわしいものは見当たらなかった。一番注目したのは葉山美玖氏の『約束』で、この詩人の成長を物語るすぐれた成果が認められるが、すでに某新人賞の候補にも上がっており、そちらでの顕彰を期待すべく、ここでは佳作とした。準賞には上野芳久氏の『風の道』と水木萌子氏の『かぎろい』を選んだ。いずれも円熟期にある作者の充実ぶりが窺われる好詩集。前者は、「風とともに生きる」という一貫したモチーフを全篇に徹底させたおどろくべき持続への意志に、後者は、教師としての経験に裏打ちされた詩行の運びの巧みさに、それぞれ感服させられた。惜しむらくは、双方ともに詩的想像力の着地点がややステレオタイプであった。なお、十代からの応募は、蜻蛉泪氏の『窓外』という一作品のみだったが、若い感性がよく表出されている快作で、こういう十代の作品がほしかった。奨励賞を贈るにふさわしい。

(野村 喜和夫)

### 【短歌部門】

応募は22歳から89歳までの49点。

その中で準賞に渡辺栄治『位相』と生沼義朗『空間』の二作に決まった。

渡辺氏は1949年生まれ。

- ・耐性を獲得したる細菌が増殖しゆくこの世紀末
- ・おしなべてこの世はシュールなるものかダリはあの世で地球を笑ふ  
製薬会社に勤務したこともあって科学者らしい理性的な目がある。  
生沼氏は1975年生まれ。
- ・ステンレスのレーンを走る製品の群を経済力と言うらむ
- ・真夏へと向かう途上の雨なれば強く短くひたむきに降る  
さまざまな「空間」を、実験的な方法をもって捉え、新しい角度を見出し  
ている。

佳作は近藤栄昭『白い虹』、中津川勲坐『宇宙地図』、辻村雅子『柿実る』、  
都茉莉「大人にはまだ」、岩本実佳「夏、夏、夏」、坂井傑「気泡」。

(沖ななも)

### 【俳句部門】

応募作品83編（句集7、原稿76編）。選考委員は、岩淵喜代子、尾堤輝  
義、落合水尾の三名である。

準賞二名の決定をみた。山崎十生氏と粉川伊賀氏。前者は句集『未知の国』、  
73歳、川口市、「紫」主宰、第十句集。抑えの効いた表現は魅力的で、印象  
深い。「霜柱滅する力蓄へる」「手抜きなどなく全山のしたたれり」。後者は句  
集『一庵』、70歳、久喜市、「浮野」同人、平成24年に準賞を受賞している。  
立体的詠出が力強い。「一庭に一水に春動きけり」「國蔵の一笛はるか夏神楽」  
奨励賞はない。次に佳作六編を紹介する。

若杉朋哉『朋哉句集二』。山口素基『花筐』。石井一枝『雪催』。河邊幸行子  
『お百度ごころ』。倉持梨恵『水になるまで』。田中美佐子「通り雨」。

力作ぞろいであった。

(落合 水尾)

## 【川柳部門】

応募数は前回とさほど変化はなく、今回も埼玉文芸賞に該当する作品が選べず、準賞2名を推挙した。

準賞1席の田村恵滋「深呼吸」は酒が好きな方の句。楽しみながら飲むお酒の旨さは格別でしょう。健康志向の句に現代性が表現されている。

- ・取り柄なく大病なしで古稀を超え
- ・名月を転がしながら手酌酒

準賞2席の矢澤俊美「裁く」は、非日常的な光景（裁判所）を切々と詠まれており内面の感情が見事に映し出されている。原告、被告、裁判官の苦悩の表現が素晴らしい。

- ・親権の亀裂に揺れる母性愛
- ・極刑へ裁判官の不眠症

佳作には岡田孝道「令和元年」、佐藤京子「キャッシュレス」、小野嗣朗「自由」、市村禎雲「心のスケッチ」、塚田健次「感謝」、閑野道子「チャレンジ」の6名が選ばれた。

(四分一周平)